

琉球大学学術リポジトリ

大学教育におけるライフセービング教育プログラムの開発と実践効果

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2011-04-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 真栄城, 勉, 和田, 太志, Maeshiro, Tutomu, Wada, Taishi メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/19046 |

大学教育におけるライフセービング教育プログラムの 開発と実践効果

真栄城 勉^A, 和田 太志^B

The development and the practice effect of a lifesaving educational program in university education

MAESHIRO Tutomu A, WADA Taishi^A

1. はじめに

小峰(2008)は、体育・スポーツ系大学におけるLifesaving教育の体系化を試みる中で、「大学生がレスキューや救命、事故防止の大切さについて学び社会へでたとき、スポーツ指導者は子どもたちへの運動の楽しみと共に、安全や事故防止教育を行うことが可能になる」と主張している。また、そのことが、現代の子どもたちの中で希薄になりつつある、命の重さや大切さ、思いやりの心といった生命の尊厳を考える機会の創出に連動するともいっている。体育・スポーツ系大学のめざす「Life-saver」は、「水辺の利用者自身による安全の自律」、「溺れさせない、けがをさせないための教育とリスクマネジメント」、「事故を防止するための積極的なレスキュー」を心がけ、Lifesavingの実践を奨励している。

琉球大学生涯健康教育コースにおいては、スポーツ指導者の養成段階において「スポーツ指導の体験活動を通して、子どもたちとふれあい、子ども理解のなかで実践的指導力の基礎を身につける」ことを目的に、「チームどんどんスポーツ教室」(2007～2008)や「美ら海キッズ教室」(2009)をRSLC(Ryukyu Sports Life Comyunication)との協力連携事業を展開してきた。当コースにおける「社会体育指導実習」授業のねらいは、生涯スポーツの現場においてその職場の責務と役割を理解した上でその対象者とのコミュニケーションを通して、将来指導者となるための体験を積み、指導者としての基礎的能力と資質を培うことにある。本年度の

実習では、シュノーケリングスキルのマスターと救助法ならびにライフセービング教育の知識と技術を習得した上で、附属小学校で実施される自然体験学習の学習支援を行うことを主要なテーマとした。学生には、児童のシュノーケリング体験中におけるマリパトロールを体験する前に今回開発したライフセービング教育プログラムを受講させた。本稿では、開発したライフセービング教育プログラムの内容と実践プログラムで得られた指導の効果と課題について報告したい。自然体験活動や海洋スポーツの重要性が指摘される中、体育・スポーツ指導者養成をねらいとする本コースの「社会体育指導実習」におけるライフセービング教育プログラムの点検・評価を行うことは意義深いことであると考えられる。

2. 研究方法

調査方法：質問紙法によるアンケート

調査対象：

本研究における対象者は、2010年前期に「社会体育指導実習」を履修した学生10名と「海プロジェクト自主講座」(日本財団助成事業)の受講生7名、計17名であった。

調査期間：

2010年5月7日(事前)および7月18日

学内にて即日回収

調査項目：合計25項目

1) 知識の熟知度

(リスクマネジメント、水辺での救助技術、救命救

* 琉球大学教育学部^A、琉球大学教育学部特命研究員^B

急,応急手当,海に対する自己能力の5項目)

2) 実践の自信度

(リスクマネジメント,水辺での救助技術,救命救急,応急手当,海に対する自己能力の5項目)

3) 身体能力の自信度

(力,スピード,機敏性,柔軟性,忍耐力の5項目)

4) 泳力を含む能力の自信度

(チームワーク,「浮く」,「泳ぐ」,「息止め」,水辺でのコミュニケーション能力,「パドル」,水中での自己防衛,ロープワークの8項目)

5) 海を活用した教育活動の重要性1項目

6) 海を活用した教育活動実践への自信度1項目

結果の集計・分析:

知識に関しては,「全く理解していない」(1点),「理解していない」(2点),「どちらともいえない」(3点),「理解している」(4点),「十分に理解している」(5点)の5件法により自己評定を対象者に求めた。自信度に関しては,「全く自信がない」(1点),「自信がない」(2点),「どちらともいえない」(3点),「自信がある」(4点),「大いに自信がある」(5点)の5件法により自己評定を対象者に求めた。結果については,平均値(M),標準偏差(SD)を算出し対応のあるt検定を行った。分析には,統計解析プログラム PASW Statistics 18 for Windows を使用した。

3. 結果および考察

3-1-1 ライフセービング教育プログラム

社会体育指導実習 カリキュラム

● 月曜日 2限目(90分) (教育学部 生涯健康教育コース学生が主)

第1回 5/10 オリエンテーション

第2回 5/17 リスクマネジメントの基本的な考え方と,水辺におけるリスクマネジメント

第3回 5/24 海の知識,海洋危険生物と対処方法

第4回 5/31 救急法(心肺蘇生法)

第5回 6/7 シュノーケリング実習・水中自己防衛術・救命技術

第6回 6/14 シュノーケリング実習・水中自己防衛術・救命技術

第7回 6/21 シュノーケリング実習・水中自己防衛術・救命技術

第8回 6/28 シュノーケリング実習・水中自己防衛術・救命技術

第9回 7/5 海洋研修(前田岬)

海プロジェクト自主講座 カリキュラム

● 金曜日 1限目(90分) (教育学部 保健体育科学生が主)

第1回 5/7 オリエンテーション

第2回 5/14 リスクマネジメントの基本的な考えと,水辺におけるリスクマネジメント。監視とは(方法と留意点:スキュービング)

第3回 5/21 海の知識,海洋危険生物と対処方法

第4回 5/28 救急法(心肺蘇生法)

第5回 6/4 水中自己防衛術,簡単なレスキューテクニック(トーク・リーチ・スロー・ウェイド),器具を使わない水中でのキャリア,フィットネス

第6回 6/11 身近にあるものを利用したレスキュー(ペットボトル,ロープワーク),レスキューチューブを利用したレスキュー(意識有,無),フィットネス

第7回 6/18 レスキューボード体験(パドルング,レスキュー),レスキューチューブを利用したレスキューの応用,生体への心肺蘇生法(逆流の対応と回復体位),フィットネス

第8回 6/25 シナリオレスキュー,フィットネス

第9回 7/5 海洋研修(真栄田岬)

3-1-2 ライフセービング教育プログラムの内容

プログラム内容は,「海やプールでの救助技術」「自己を起こさないための危機管理術」「救命・救急法全般」を中心に,日本ライフセービング協会(JLA),ウオーターリスクマネジメント協会(WRMA),日本水泳場安全協会(JASA),国際救命救急協会(IEMA),アメリカ心臓協会(AHA)の講習内容を参考にして和田が作成した。

3-1-3 テキスト『海浜活動基礎マニュアル』による知識習得

- (A) リスクマネジメント：危機管理意識の構築
- (B) 海の知識：波・流れ・潮汐
- (C) 救急法とAED
- (D) 応急手当の基本と海の危険生物
- (E) レスキューテクニック

【テキスト概要】

(A) リスクマネジメント：危機管理意識の構築

☆リスクマネジメントとは：安全を確保する為、システムを構築し人的能力と技術を活用したより効果的な方法により、未然に予防策を講じる。若しくは事後速やかに対処する事。

☆リスクそのものを管理する「プロセス」

「もしも」を起こさない→「事故」の防止

「もしも」が起きた時に何をすべきか→「悪化」の防止

☆水辺では、ウォーターリスクマネジメント（水辺に特化したリスクマネジメント）を遵守する。

☆リスク＝事故に遭遇する可能性

☆リスク発生の仕組み 事故発生の引き金

☆海・水辺で考えられるリスクとは？

海・水辺で考えられる危険因子

人的側面からの危険因子

☆ リスク管理の3原則

阻害要因の検出 危険性の認識 リスクの分散

☆リスク発生時の事故を未然に防ぐための3要素

回避 (Avoid) コントロール (Control) 削除 (Eliminate)

☆リスク削減のための3方法

知識 (Knowledge)

能力 (Ability)

技術 (Technology)

☆リスクマネジメントのプロセス

(危険察知→リスク管理→防止または軽減方法の選択→実行→管理と評価) の循環

セフティリスクマネジメントの4ルール

☆バザードチェック (当日までに確認すること)

●現場海域の状況

地形や水深 (干潮・満潮時の状態)

流れの有無と速さ

危険地帯等

(海藻等で足が絡まりやすい・水底に岩がごろ

ごろしている・航路付近・ブイやロープ、網等体に絡まりそうな物体の有無等)

危険生物

水質 (透明度等)

水底 (リーフ・サンゴ・岩場・ヘドロ・・・等)

●参加者の能力

参加者個人の能力は十分か？

現場の海況に対して

(年齢・性別・泳力・心肺機能・知識レベル・技術レベル・経験・慣れ・モチベーション等)

当日の健康状態・精神状態

●指導者の能力

引率・指導者の能力は十分か？

「もしも」が起こった場合の備え「知識・技術・心構えは十分か？

●自然状況の確認

天気予報

降水確率

気温 (1日の変化も合わせて)

紫外線の強さ

波の高さ

風の強さと吹く方向

潮周りの確認 (干潮・満潮の時刻)

●緊急時に備えて

緊急時の対応マニュアルの作成と周知

搬送経路の確認

搬送先の確認

避難場所の確認・確保 (地震・津波等の災害に備えて)

救護場所の設置・確認

必要な資器材の確認 (救急箱・AED・感染防止用具・タオル・毛布等)

*資器材について、施設にあるものか用意すべきものは要確認

使用する資器材のチェックも忘れずに！！



(B) 海の知識：波・流れ・潮汐

●波とは：水面（海面、川面）の上下運動（＝エネルギー）が伝わる事。

発生原因によって大きく3種類に分けることができる。

●風浪：風によって生じる。

風が吹く強さ 風が吹き渡る距離

風が吹いている時間

●潮汐波：潮の干満によって起こる。

●津波：地震などの地殻変動によって起こる。

●砕波：波（うねり）が、その形を維持できずに前方へと崩れている状態。

種類：崩れ波 巻き波 砕け寄せ波

海底の地形の影響で波の崩れ方は変化する。

●カレントとは：潮（水）の流れの事。

リップカレント：海岸から沖に向かう、速い流れ。

リーフカレント：リップカレントの一種で、珊瑚礁等の海底構造物がある海域で発生する流れ。

*沖縄では特にリーフカレントに注意が必要である。

●潮汐とは：月や太陽の起潮力の影響によって、海面が周期的に昇降する現象。

水位が極大のときを満潮（高潮）、極小のときを干潮（低潮）という。

満潮と干潮は、およそ1日に各2回ずつ起こる。

*沖縄では、大潮だと朝と夕方（夜）が満潮で昼間が干潮となる。

小潮の日は、逆に昼が満潮で朝と晩が干潮になるが、満潮でも水位は低い。

潮汐の影響

水深の変化：潮回りによって、1日の間で水位が変化する。



満潮に向かう潮：上げ潮

干潮に向かう潮：下げ潮

流れの発生：大量の水が動く為に、流れ（潮流）が発生する。

地形の確認：水深の変化によって、普段気がつかない深みにはまってしまう。

*沖縄では暗礁などにも注意が必要である。

(C) 救急法とAED

☆救命の連鎖

救急車要請から到着までの平均所要時間：日本・・・約7.7分

呼吸停止からの生存率：3分：75% 4分：50% 5分：25%（ドリンカーの生存曲線）

☆心肺蘇生の目的：「社会復帰」

生命活動・意識活動の源は「脳」：（約4分で脳のATPはゼロになる）

心停止 → 全身（特に「脳」）エネルギー源の供給停止 → 脳死

人口呼吸・・・体内に酸素を取り込む

胸骨圧迫・・・全身（特に「脳」）に血液を送る

☆『D.R.A.B.C.D』（ドクターA B C D）

Danger：周囲の安全を確認。

自分・周囲の人・状況・傷病者

Response：意識の確認。呼びかけ・

痛み刺激 反応無→119番・AED

Airway：気道の確保。頭部後屈・顎先挙上法

Breathing：呼吸の確認

『見る・聞く・感じる』 呼吸無

→2回の吹き込み

Compression：可能であれば頸動脈触診で脈の確認。

脈が無ければ 30:2 (胸骨圧迫：人口呼吸)
胸骨圧迫は「強く・早く・絶え間なく」

Defibrillation:AED を装着。必要があれば除細動。

☆AED の使用法

☆AED のポイント

パッドの位置 (基本)：胸部の右鎖骨下と左脇下 5～8cm

水：傷病者が水に沈んでいる、もしくは水で胸部がぬれている場合はショックは行えない。水から引き上げるか、胸部の水を拭き取った後にパッドを貼る。

薬剤：(貼り付けてあるもの)パッドを貼ろうとした場所に、貼付薬剤がある場合は、はがして場所を拭いた後パッドを貼る。

ペースメーカー等：胸部に盛り上がり確認できる。盛り上がっている部分から約 2.5 cm 以上離れた場所にパッドを貼る。この場合、片方のパッドが心臓を中心に(立体的に)対角線上に心臓を挟むように 貼りなおす。

体毛：カミソリで体毛を剃る。予備のパッドがあることを確認し、パッドをしっかり押し付けた後、勢いよくはがして胸毛をはがし、新しいパッドを貼り付ける。

胸部とパッドの間に隙間を作らないことが大事。

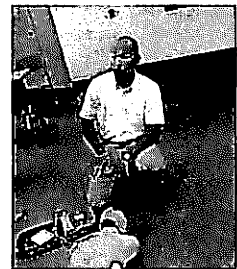
金属性のアクセサリ類：2 枚のパッドの対角線上に位置しないようにする。

止むを得ない場合は取り外す。

☆成人に対する CPR と AED 手順

☆小人に対する CPR と AED 手順

☆乳児に対する CPR と AED 手順



成人に対する CPR 実習



乳児に対する CPR 実習

(D) 応急手当の基本と海の危険生物への応急手当

☆応急手当：負傷者や急病人を医師等に引き渡すまでの間に、症状を悪化させない為に一般市民が行う一時的な措置。

☆救命処置：止血法や心肺蘇生法は応急手当の中に含まれるが、より緊急性が高い為、救命処置として区別されている。

☆応急手当の基本

☆応急手当を行う際の原則

・二次災害の防止：傷病者と救助者自身の安全の確保。感染症等

・傷病者の同意を得る。意識が無いなど直ちに手当てが必要な場合は手当てを優先。

・医療行為の禁止：診断行為 医薬品の使用 死亡判断等

・守秘義務：傷病者のプライバシーに関することを口外しない。

☆バイタルサイン (呼吸・脈・血圧・体温) の確認：Japan Coma Scale

☆呼吸の確認：分間の呼吸数とその深さ、リズム等を観察。異常な呼吸例。

頻呼吸：24 回/分以上 徐呼吸：12 回/分以下

☆脈の確認：1 分間の脈拍数とその強弱、リズムを観察。

脈拍は、運動や発熱、薬などにより変化する。

成人の基準値 (WHO) 60~80 回/分

☆体温の確認: 体温は、視床下部にある体温中枢によって一定に保たれている。

成人の基準値 (WHO) 36.5~37.0℃

☆処置の基本: コミュニケーション、シンプル、ショックの除去

☆海の危険生物への応急手当

ハブクラゲの応急手当

カツオノエボシの応急手当

イソギンチャクの応急手当

オコゼの応急手当

オニヒトデなどの応急手当

ヒョウモンダコの応急手当



(E) レスキューテクニック

☆レスキューの原則

☆レスキュー方法の分類

☆トーク (Talk): 陸上から声をかけ、安全な場所へと誘導する方法。

☆リーチ (Reach): 陸上から、救助者の手足もしくは長い棒などを溺者へ差し出して救助する方法。

☆スロー (Throw): 陸上から、浮力のある物等を溺者へ投げ入れて救助する方法。

☆ウェイド: 足が届く水深で、救助者が歩いて近づき、救助する方法。

☆ロウ (Row): ボートやボード (サーフボード・レスキューボード等) を使用して救助する方法。

☆スイム (Swim): 泳いで救助する方法。救助者自身の安全を確保する為、レスキューチューブ等の浮力のあるものを使用することが望ましい。

3-1-4 シュノーケリングスキルの習得

基礎練習

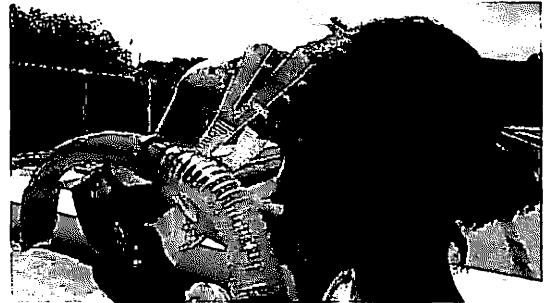
①マスク・シュノーケル・フィンの装着方法。

②シュノーケルでの呼吸法・シュノーケルクリア・マスククリア・フィンの使い方。

③シュノーケルセットで0の泳ぎ方・立ち方な

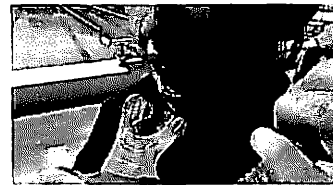


ど。



3点セット

マスクのかぶり方



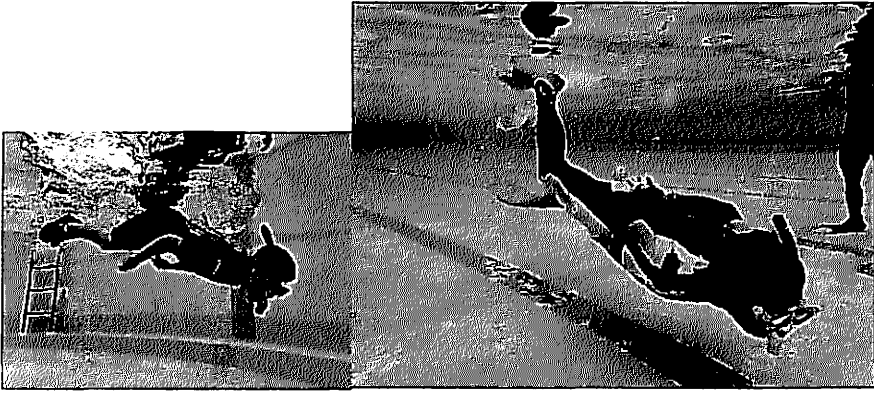
口の形「アー」



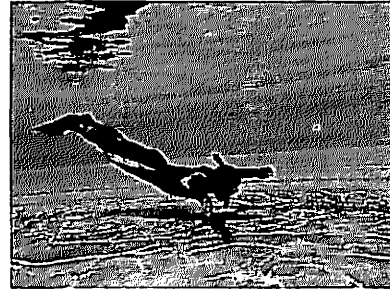
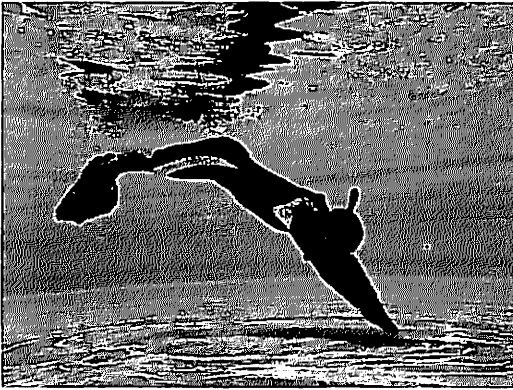
口の形「イー」



口の形「ウー」



☆ ヘッドファーストダイブ (ジャックナイフダイブ)



☆ マスククリア



☆ シュノーケル海洋研修

事前確認：①バディシステム・水中サインの確認。

②フィールドの特性(リーフカレントの発生箇所など)、
危険な海洋生物等の説明。

③サンゴ類の保護・海洋生物の保護などフィールドの環境
保全についての説明。



恩納村真栄田岬での海洋研修 (1)



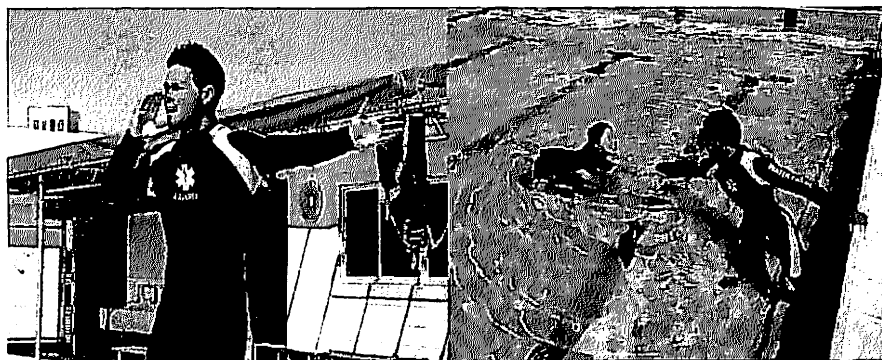
恩納村真栄田岬での海洋研修 (2)

3-1-5 ライフセービングスキルの習得

☆ 水中自己防衛術



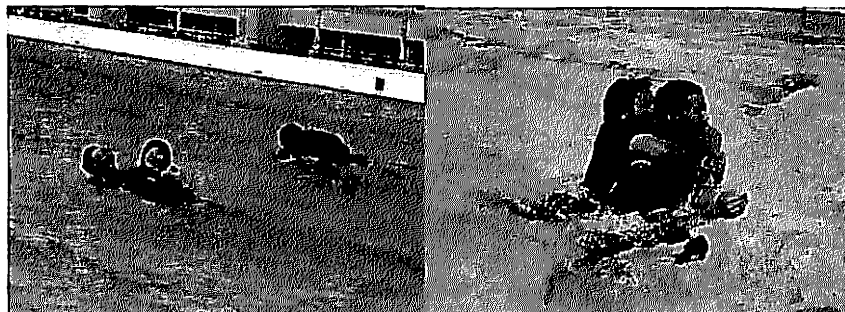
☆ 簡単なレスキューテクニック（トーク・リーチ・スロー・ウェイド）



☆ 身近にあるものを利用したレスキュー（ヒューマンチェーン、ロープワーク）



☆ 器具を使わない水中でのキャリー



☆ フィットネス



水中での人工呼吸



水中でのキャリー

☆ レスキューチューブを利用したレスキュー(意識有,無)



☆ レスキューボード体験(パドリング,レスキュー)



☆ シナリオレスキュー



3-1-6 ウォーターパトロール体験

2010年7月8日(木)～10日(日) 渡嘉敷島 国立青少年交流の家

表1 日程表

| | 初日 | 2日目 | 3日目 |
|----|------------|------------|----------|
| 午前 | | パトロール体験Ⅱ | パトロール体験Ⅳ |
| 午後 | パトロール体験Ⅰ | パトロール体験Ⅲ | |
| 晩 | スタッフミーティング | スタッフミーティング | |

基本的に海洋研修プログラムは、附属小学校の「かがやけ！宿泊体験学習」(渡嘉敷島)のプログラムであるマリタイムに対応する形で構成した。

(表1参照)なお、夜間は、スタッフミーティングで資質向上に資するためのふりかえりを行った。



入水前の安全確認 全体指導



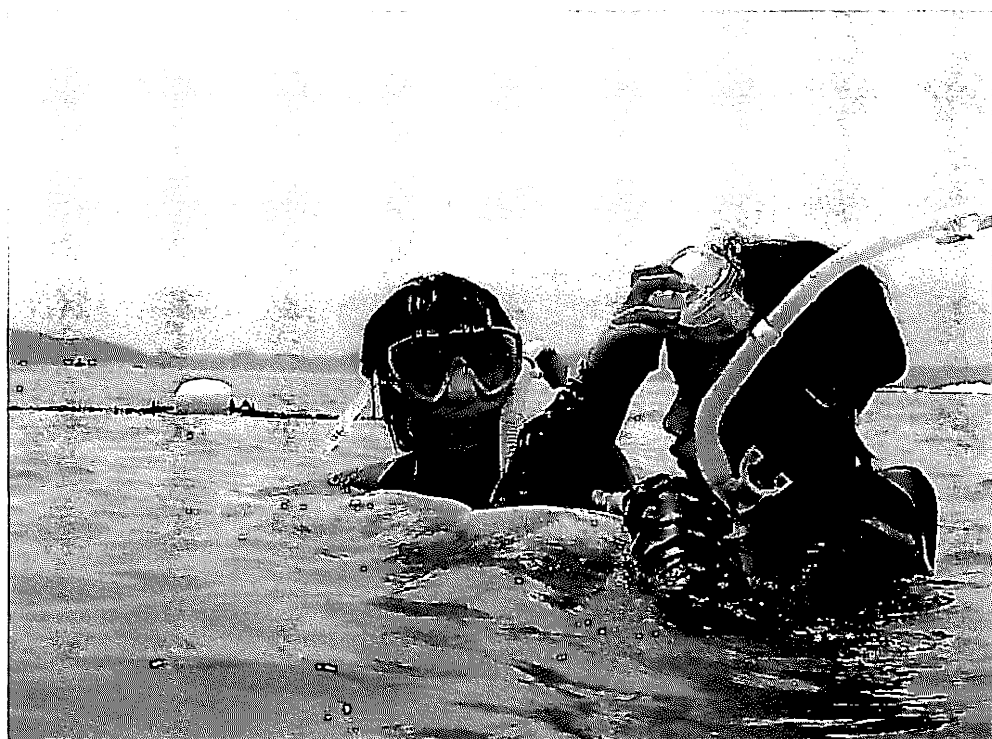
装備の確認

隊列指導と安全監視



泳力のない児童へのサポート





不安感を持つ児童への声かけとサポート



バディチェックと隊列指導

マリパトロール体験後のミーティング風景



夜のミーティングでの省察(振り返り)



海上レスキュー訓練



学生ライフセーバースタッフ

3-2 成果

ライフセービング教育の指導効果について学生のアンケート調査(事前事後の比較)と海洋研修の振り返りシートから成果をまとめた。

3-2-1 ライフセービング教育の指導効果 1

(学生の意識の変容：事前・事後調査)

(ア) 知識に関して

表2 知識に関しての理解度

| I 知識に関する理解度 | 事前 | | 事後 | | t値 | 有意水準 |
|-----------------|------|------|------|------|--------|------|
| | M | SD | M | SD | | |
| 1 リスクマネジメントに関して | 1.53 | 0.64 | 4.13 | 0.35 | -15.92 | *** |
| 2 水辺での救助技術に関して | 1.87 | 0.74 | 4.13 | 0.35 | -10.99 | *** |
| 3 救命救急に関して | 3.47 | 0.74 | 4.33 | 0.49 | -4.52 | *** |
| 4 応急手当に関して | 3.60 | 0.63 | 4.00 | 0.76 | -1.47 | |
| 5 海の知識に関して | 2.60 | 0.83 | 3.53 | 0.74 | -4.53 | *** |

(N=15) ***<0.001 ** P<.01 * P<.05

知識の項目は、講義内容で主なテーマにした「リスクマネジメント」、「水辺での救助技術」、「救急救命」、「海の知識」の5項目である。「応急手当」を除く4項目において事後の結果が事前の結果を有意に上回った。4項目において、知識・理解が深められたと解釈される。

ライフセービング教育から事故防止を考えたとき、「リスクマネジメント」や「水辺での救助活動」の知識を習得することは短期間で成果も得やすいテーマともいえよう。

(イ) 実践にあたっての自信度

表3 実践にあたっての自信度

| II 実践にあたっての自信度 | 事前 | | 事後 | | t値 | 有意水準 |
|------------------|------|------|------|------|--------|------|
| | M | SD | M | SD | | |
| 1 リスクマネジメントに関して | 1.73 | 0.80 | 3.33 | 0.72 | -8.411 | *** |
| 2 水辺での救助技術に関して | 1.53 | 0.74 | 3.33 | 0.72 | -7.407 | *** |
| 3 救命救急に関して | 2.40 | 0.82 | 3.53 | 0.83 | -3.371 | ** |
| 4 応急手当に関して | 2.80 | 0.77 | 3.40 | 0.74 | -2.358 | * |
| 5 海に対する自己の能力に関して | 2.67 | 0.72 | 3.47 | 0.99 | -5.527 | *** |

(N=15) ***<0.001 ** P<.01 * P<.05

知識に加えていざ事故に遭遇した際の具体的な救助や救命活動の技術を獲得しておくことは、教師やスポーツ指導者を目指す学生たちには必要不可欠な要素である。児童生徒の命を預かる立場であり、大きな責任を伴う立場にたつ経験をするなかで安全教育、事故防止教育に資する能力を高めることは教員養成の中でもっと重要視されてしかるべきものでもある。

今回の調査結果から、「リスクマネジメント」、「水辺での救助技術」、「救急救命」、「応急手当」、「海に対する自己能力」の全5項目において、事後の結果が事前の結果を有意に上回った。このことは、参加した学生が、ライフセービング教育プログラムを体験したことで、救助活動や救命活動に自信をつけたことを意味する。体育教師やスポーツ指導者、健康運動士をめざす学生らに知識・技術、その重要性を伝えることで、救命を基礎にした「生命の尊厳」観に基づいた教育的価値観の深化も期待できるであろう。

(ウ) 自身の身体能力について

表4 身体能力についての自信度

| III 身体能力についての自信度 | 事前 | | 事後 | | t値 | 有意水準 |
|-----------------------|------|------|------|------|--------|------|
| | M | SD | M | SD | | |
| 1 「力(Strength)」について | 2.80 | 1.01 | 3.20 | 1.08 | -1.871 | |
| 2 「スピード(Speed)」 | 3.08 | 1.22 | 3.33 | 1.05 | -0.774 | |
| 3 「機敏・俊敏性(Agility)」 | 3.27 | 1.10 | 3.47 | 0.92 | -0.764 | |
| 4 「柔軟性(Flexibility)」 | 2.67 | 1.11 | 3.47 | 1.13 | -2.449 | * |
| 5 「忍耐・持久力(Endurance)」 | 2.93 | 1.10 | 3.40 | 1.06 | -1.825 | |

(N=15) * P<.05

海洋スポーツは、常に危険を伴っており、どのレベルで行える体力なのかを知っておくことは、無理だと判断すればやめる勇気を持つことにもつながる。ライフセービング活動においても、泳力に限らずライフセービングのための体力が要求される。今回のプログラムでは、泳力強化や救命活動のための体力強化を試みたプログラムも企画したが、「柔軟性(Flexibility)」を除いて身体能力の向上があったとは学生は考えてない。実施トレーニングプログラムの再検討が必要であると考えられる。

(エ) 救命活動能力について

表5 救命活動能力の自信度

| IV 救命活動能力についての自信度 | 事前 | | 事後 | | t値 | 有意水準 |
|-------------------|------|------|------|------|--------|------|
| | M | SD | M | SD | | |
| 1 チームワークについて | 4.07 | 0.70 | 4.48 | 0.84 | -2.449 | * |
| 2 「深く」ことについて | 3.60 | 1.12 | 4.13 | 0.89 | -0.533 | |
| 3 「浅く」ことについて | 3.47 | 1.08 | 3.73 | 0.96 | -1.293 | |
| 4 「息止め」について | 3.13 | 0.83 | 3.40 | 1.12 | -1.075 | |
| 5 (水辺)コミュニケーション能力 | 3.33 | 0.90 | 3.67 | 0.83 | -2.779 | * |
| 6 「バドル」について | 2.00 | 1.00 | 3.33 | 0.82 | -6.325 | *** |
| 7 「(水中での)自己防衛」 | 2.47 | 0.74 | 3.33 | 0.82 | -4.026 | *** |
| 8 「ロープワーク」について | 2.00 | 0.76 | 3.07 | 0.88 | -4.298 | *** |

(N=15) ***<0.001 ** P<.01 * P<.05

海洋スポーツを行う者は、少なくとも上記8項目を身につけておくことが望まれる。これらの項目は、救命活動においても必須とされる技術であ

る。今回のプログラム実施後「チームワーク」、「浮く」、「水辺コミュニケーション能力」、「パドル」、「水中での自己防衛力」、「ロープワーク」の6項目において参加者の自信度が有意に高まった。息止め、泳力の自信度は深めることができなかったの、次回の課題としたい。

(オ) 海を活用した教育活動について

表〇 海を活用した教育活動の自信度

| V 「海」を活用した教育活動について | 事前 | | 事後 | | t値 | 有意水準 |
|--------------------|------|------|------|------|--------|------|
| | M | SD | M | SD | | |
| 1. 海の教育活動の重要さ | 4.67 | 0.49 | 4.47 | 0.52 | 1.871 | |
| 2. 教育活動実践の自信度 | 2.70 | 1.03 | 3.80 | 0.68 | -3.754 | ** |

(N=15) **P<0.01 *P<0.05

海洋教育活動の重要さに関しては、「特に必要ない」(1点)、「さほど重要でない」(2点)、「どちらともいえない」(3点)、「重要ある」(4点)、「大変重要である」(5点)の5件法により自己評定を対象者に求めた。結果については、平均値(M)、標準偏差(SD)を算出し対応のあるt検定を行った。

国民の生涯スポーツ・レジャーに関する関心は非常に高く、水辺活動としてのマリンスポーツも高い人気を得ている状況下にある。学校における集団宿泊行事や体育学習などでのマリンスポーツの導入も試みられてきておりその活動の重要性について対象者の意識を問うた項目である。青い海に囲まれ島嶼環境の沖縄にあって「海」を活用した教育活動はとても重要であるとの判断に至っていることがわかった。事前事後とも共に高い平均値を示し、有意な差は見られなかった。

救命活動を実践するにあたっての自信度に関しては、「全く自信がない」(1点)、「自信がない」(2点)、「どちらともいえない」(3点)、「自信がある」(4点)、「大いに自信がある」(5点)の5件法により自己評定を対象者に求めた。結果については、平均値(M)、標準偏差(SD)を算出し対応のあるt検定を行った。

体育教師やスポーツ指導者として「海」を活用した教育実践やプログラムの運営にどの程度の自信の深まりがあったのかを探るために最後の項目に採用した。その実践するにあたっての自信度は有意に高まっており、今回のプログラムの有効性を導き出しているともいえる。

3-2-2 ライフセービング教育の指導効果2 (ウォーターパトロール体験の振り返り)

「海を活かした教育」を推進するうえで必要となる人材を育成するため、生涯健康教育コースと保健体育科専修の学生を対象として海の知識、海辺での救助技術、救命技術、ライフセービングスキルなどを習得させてきた。この体験研修では、附属小学校の海洋研修(シュノーケリング研修)を活用してウォーターパトロール体験で習得したスキルの実践能力を高めることを目的とした。参加者のウォーターパトロール体験の振り返りレポートからどのような実践能力が高まったのかを探りたい。研修に参加した学生は、その日の活動の内容と振り返りといった活動記録を書くことが求められていた。この活動記録に基づいて、毎回実習後の夜のスタッフミーティングで情報の共有とインストラクターから助言を得た。このミーティングで活動の省察が行われ、実習後にまとめた形でレポートとして提出させた。今回は、その代表的な声を紹介したい。

ウォーターパトロール実習レポート (一部)

研修生 AN レポート

★課題1★ ウォーターパトロール活動についてのまとめ

1日目

1. パトロール中、特に何に気を使ったか
 - ・児童の安全確認(苦しそう、疲れている子はいないか。バディーが離れていないか)
 - ・児童への声掛け
 - ・海中での進行方向
2. 怖さを感じた瞬間、それはどんな時だったか
 - ・児童がバディーがいないと普通に言っていたとき
 - ・バディーの確認が曖昧だったとき
 - ・児童に抱きつかれて、レスキューチューブを渡したが、チューブが無かったら危なかった
 - ・児童が進行方向とは違う方向に進んでいたとき

3. 良かったと思える点,反省しなければならない点

<良かった点>

- ・児童たちへ魚を見るように促したり,バディーがいるかどうかの声掛けをしっかりと行ったこと。
- ・児童たちへのフォロー(泳ぐのが怖いという子と一緒に泳いだりした)

<反省点>

- ・ペース配分
 - ・学生4人の連携不足
- ### 4. 次の日のパトロール活動へ向けての課題
- ・ハンドシグナルを確認する。
 - ・児童たちを楽しませる。
 - ・臨機応変に対応する。(レスキューチューブを回すなど)
- ### 5. その他,感じたこと,気づいたことなど
- ・海は意外に深くて波がある。
 - ・児童の列が長かった。
 - ・児童たちにバディーの大切さをもっと感じてほしい。
 - ・児童同士の接触や進路がずれるのは当たり前だと思って,対応する。

2日目

1. パトロール中,特に何に気を使ったか

- ・余裕を持つ。
- ・コースが変わったこと。
- ・班員の連携
- ・子供たちの疲れ具合

2. 怖さを感じた瞬間,それはどんな時だったか

- ・ウミヘビを見たとき。(危険な生物は身近にいる)
- ・児童の列がつまって児童同士の接触があったとき。
- ・サンゴがいきなり近くにあって座礁したとき。

3. 良かったと思える点,反省しなければならない点

<良かった点>

- ・児童たちと交流がうまく持てた。
- ・児童が1日より海に慣れてきた。
- ・個人個人への対応
- ・班員の連携が良くなった。

<反省点>

- ・児童の列が長かった。
 - ・魚がいたら児童たちが止まってしまうと列がつまった。
 - ・児童たちがばらけるときのあった。
- ### 4. 次の日のパトロール活動へ向けての課題
- ・次は最終日だから児童たちにもっと楽しんでもらって,自分たちも楽しむ。
 - ・児童たちの体調を考慮しながら無理をさせない。
 - ・最終日で,慣れや疲労もあるので,気を抜かない。
- ### 5. その他,感じたこと,気づいたことなど
- ・小学生は可愛い
 - ・児童たちが疲れていても,どう盛り上げるか。
 - ・コース変更への対応。
 - ・昨日は1人で泳げなかった子が1人で泳げるようになっていたことが嬉しかった。
- ### 6. 前日の課題は達成できたか
- 達成できた!

3日間のウォーターパトロールを終えて

1. 自信となった点

私はもともと泳ぐのが得意ではなく,海で泳ぐことも久しぶりででした。でも,プールや前田での練習を積みながら,スーツとマスクとフィンがあることで,泳力に自信がなくても泳ごうと思えば泳げるのだなということを感じました。さらに,自分のことだけでなく,児童たちの安全を守るとなると泳ぎは得意じゃないからということとは理由にならず,むしろ児童たち自分たちのことを信頼して頼ってくれると感じると,責任感が増したように感じました。

2. 自分に不足していると感じた点

自分に不足していると感じた点は,班での反省にも出たように余裕がなかったことです。小学生たちにもっと余裕を持って接することができれば,もっと楽しんでもらえただろうなということをとっても感じました。この余裕のなさは,自分の泳力に自信がないということだけでなく,海の中でいざという時に本当に助けられる自信がなかったこともあるように思います。実習に向けて,救助法も練習してきたけど,やっぱり自信が持てていなかったのかも知れないと思いました。今回の海で

の実習を機会に自分の泳力や海に関する知識や技術をもっともっと付けていきたいと感じました。

3. その他,感想

渡嘉敷島での実習を終えて,とても貴重な経験をする事ができたと感じています。この授業がなければ自分がシュノーケリングをする機会はなかったのではないかと思います。この短期間の間で,自分が成長したと感じたことや,まだまだ自信が足りない面がたくさん見えてきました。成長したと感じたことは自信に,不足していると感じた点は改善していきたいと思いました。また,海に関わる仕事は自分が思っていた以上に体力や気力が必要だということも感じました。

今回のシュノーケリングの経験を機会に,今年の夏休みでシーカードを取得することを考えています。もしかしたら,来年もこの授業に参加するかも知れないので,それまでに自分の技術や知識をつけていきたいと思っています。

★課題2★ 今回のような教育実践で,自分だったらどうやって指導するか?

1. 設定

1クラス40人として,今回のような海洋研修で自分がシュノーケリングの担当になった時に,どのような方法で安全を確認しながら小学生たちに体験させるかを考える。

2. 方法

①グループを泳力別で4つに分ける。

グループ1:泳ぎが得意あるいは好き。(12名くらい)

グループ2・3:やや泳げる。泳ぐのが苦手ではない。(各10名)

グループ4:泳げない。泳ぐことが苦手(8名くらい)

⇒泳げる子はどんどん泳いでいこうとするし,泳げる人同士ですすもうとするので,泳力別でグループを組むようにする。

②各グループで本番に向けて泳ぐ&シュノーケリングの練習する。

⇒グループ4では一人ひとりの技術に考慮しながら補助をしていく。

③各グループ内でバディーを組ませる。

⇒泳力が同じくらいの人同士で組ませるので,バ

ディーが離れにくくなると思う。

④海での実習の際は,各グループに補助員を4名つける。

⇒グループ1は人数が他よりも多いが,泳力がある子たちであることを考慮した。グループ4では補助員が1人1ペアを見ることができるよう考慮した。

⑤シュノーケリングのコースとしては,できるだけ広い範囲を泳がせるようにしたい。

研修生 IT レポート

★課題1★ ウォーターパトロール活動についてのまとめ

1日目

1. パトロール中,特に気を使った点

今日は初めてのシュノーケリングということで,主に子どもたちの動きに気をつけるようにした。子どもがグループから外れて迷子にならないように,または安心させるために,常に声かけや合図するなどして誘導を行った。今回,子どもたちには2人1組でバディーを組んでもらっているが,すぐに列が乱れる傾向があった。スタッフ側が「自分のバディーいるか確認して!」とか「バディーと一緒に並んで泳いで!」,「バディー置いていかないで,ちょっと待ってあげよう!」などと積極的に声かけをすることでスムーズに進められるように心がけた。

他のグループとぶつからないように,自分のグループの子どもの体力も見ながらペース配分を考えた。途中で足をつっていないか,ちゃんと呼吸できているか,無理はしていないだろうかという点に気がつけた。

2. 怖さを感じた瞬間はどんな時だったか?

子どもが魚やサンゴ礁などの海の生物に興味を示し,スタッフの指示を聞き入れてくれなかった時や体力切れで集中が欠けてしまった時が怖かった。見つけた魚を追いかけようとして列から外れたり,勝手に潜ろうとするなど予想外な動きにハラハラした。子どもが興奮してテンションが上がってしまった時,どのように落ち着かせるかも大切だと思った。また,私自身がレスキューチューブの扱いに慣れていなくて,ひもに絡まったりしたので持ち方の工夫が必要だと気づいた。

3. 良かった点と反省すべき点

【良かった点】

子どもたちへの声かけや誘導は常に大きな声で行い、意志疎通を図れたことは良かった。今日は3回パトロール活動を行ったが、回数をこなしていく度に慣れていき、どんどんスムーズに進められるようになった。また、役割分担ができていた。泳ぎに自信のない子には誰がつくとか、前と後ろの確認なども上手くできていたと思う。

【反省すべき点】

最初の回では、ハンドシグナルを忘れていたためあまり良い誘導ができなかったが、同じグループの仲間からアドバイスしてもらって、その後の回では改善でき、上手くできるようになった。次のパトロールでは、声かけだけではなくハンドシグナルでもコミュニケーションがとれるように心がけようと思う。

いつもとは違う場所へやって来て、少し浮かれているかなど反省した。けっして遊びに来ているのではなく、子どもの命を預かっているわけだから、水辺教育のスタッフの一員だという自覚を持って自分自身の行動を引き締めるべきだと感じた。

4 明日のパトロール活動へ向けての課題

今日は、列が乱れてしまう部分も見受けられたので、子どもたちにもっとバディーを意識させる必要があると感じた。スタッフは今日以上に声かけやお互いの位置確認をしつつ、協力しながら活動していこうと思う。また、ずっと同じ人が前担当だと体力的にきついで、ポジションも変えていきながら進めていく方が良いだろう。

体力の問題も大きいですが、後半でガラガラしてしまう傾向があるので、最後まで気を引き締めてキビキビと行動するようにする。明日に疲れを残さないように今日はしっかりと休養をとるなどの自己管理も大切である。

●その他、感じた点、気づいた点●

体力的にまだ大丈夫なのに「疲れた～」と言ってレスキューチューブに群がってくる子どもに対して、そのまま掴まらせて楽をさせてしまった。こんな時、いざ、本当に溺れかけている子にライフガードを使おうとしても使えない。無理をさせることは絶対ダメ！だけれども、頑張っ

ぐように促すことは教育者として重要である。

自分が疲れている時こそ、もっと子どもに気を配ることが大切だ。自分自身が泳ぎ疲れている時は子どもの体力はもっと消耗しており、危険度は増す。その日のコンディションがどうなっているのか確認しつつ、フォローしていくべきだろう。

初日だったので、探りをいれつつ様子をうかがいながら…とはいうものの、やはり全体的に子どもたちも私たちスタッフもガラガラしていたように思える。シュノーケルの時間は各クラス決まっているわけで、ガラガラするとその分、体験時間が短くなってしまふ。だから子どもたちには早く準備をさせるように声かけして促して、もっと沖繩の海を満喫してほしいと思った。

★今日の一言「海はプールと違って波もあるし深い」

海は自然。自然の中ではいつも予想外の事が起き



る。プールは足もつくしサイドもあるが、海はだだっ広い果てしなく続く空間であり、もちろん足もつかなくて深い。波があれば流される危険性もある。自然をなめてはいけない。明日は、子どもたちの動きだけでなく、自然の動きにも注意しよう！

2日目

●パトロール活動について●

1. パトロール中、特に気を使った点

列を意識させるために、バディー制の安定を目指した。バディーで協力しながら動いているかに気をつけた。前日とコースが違っていたため、コースを見失わないように集中し、列の乱れをうまく修正しながら進めていった。2日目ということもあり、子どもの体調にとっても気をつけた。海に入る前に「寝不足ではないか」「朝ご飯ちゃんと食べた

かどうか」「疲れていないか」などを1人ずつ確認してから活動を行った。

前日のシュノーケリングは海を楽しむことよりも海の中を一生懸命に進むことが目的になってしまっていたので、今日は海を楽しんでもらえるような工夫をした。「ここに魚とかサングいるよ。見てごらん。」というふうな声かけ)子ども自ら「先生、ここにサングあるよ。魚もいっぱいいるー。」と近寄って来た。子どもたちは昨日よりも慣れて、落ち着いた感じでゆったりと魚やサング礁、海の青さ、波の揺れを楽しんでいた。

2. 怖さを感じた瞬間はどんな時だったか？

いつも立ち止まってマスクを外したがる子がいた。最初、溺れているのではないかとヒヤヒヤした。その子は泳力にもあまり自信がないらしく、○先生と2人がかりでサポートした。その子だけグループからかなり離れてしまったため、臨機応変に、サング礁のある所でしばらく動きを止めて、無理をさせないように海を楽しませることを優先した。

今日は潮がかなり引いて、とても浅瀬になっていた。私はサング礁との接触で擦り傷を作ってしまったので、子どもにケガをさせないように周りのサング礁にも気をつけた。「ここにはサング礁があるから、ぶつからないように、踏まないように進んで！」という声かけができた。

3. 良かった点と反省すべき点

【良かった点】

子どもたちも自分たちも、だんだんやり方が分かかってきて、昨日よりもスムーズに進めることができた。ミーティングを踏まえ、お互いのポジションを確認し合い、交代しながら役割分担がしっかりできていたと思う。子どもたちへの準備・片付けなどテキパキするように促す声かけができた。子どもたちもスタッフの指示を聞いてくれた。

【反省すべき点】

泳ぎ方に気をつけなければならない。自分の体力に余裕が無くなってくると、疲れてしまって立ち泳ぎになり、砂を巻き上げてしまう。泳ぐ時はなるべく横泳ぎで泳がなければならないと感じた。

●明日のパトロール活動へ向けての課題●

最終日なので、本当に心から楽しんでもらえるようなシュノーケリングを目指す！子どもたちと

の会話やボディ・トークも重要である。子どもたちの体力も心配であるため、最後まで気を抜かず、にチームワークを意識して運営を行う。これまでのパトロールで言えることは、海の潮というものはいつも同じ状態ではないことに注意しなければならないことだ。海に入る時には、海の状態がどうであるか確認をする必要があるだろう。

3日目

●自信となった点●

プールで練習している時は、シュノーケルの扱いにてこずり、本当に海という大自然の中上手く泳げるのか不安で、さらには子どもの命を守るという重大な役割を果たせる自信がなかった。しかし、真栄田岬での海洋研修を機に泳ぐコツをつかみ、本番の渡嘉敷島実習では明確な目標を持って活動することができた。子どもに対する声かけや扱い方にも気をつけたので、コミュニケーション力は向上しているなど感じた。教師になった時、授業を教えるスキルももちろん重要ではあるが、最も肝心なことは人と人との関わり方だと私は考えているので、今回の実習でコミュニケーション能力を高められたことは、とても大きな自信となった。

●自分に不足していると感じた点●

ウォーターパトロールの合間に行った、CPRの実技ではやはり復習を繰り返す必要があると思った。大学での講義でもCPRの実技を勉強したが、完璧にできず感覚を忘れてしまっている部分があり、定着していないことに気づいた。幸い、ウォーターパトロール中にCPRが必要な場面に遭遇することはなかったが、いざ、それが必要になった時、完璧にこなせるか不安になった。水は私たちの身近にあり、いつ危険なことに巻き込まれるかわからない。そんな時、いかに勇気を出して前進するかが重要だということを強く感じた。

★課題2★ 今回のような教育実践で、自分だったらどうやって指導するか？

今回、バディシステムは男女のペアで組まれており、お互いが協力することで友情も深まったと考えられ、とても良かったと思う。ただ、中には泳力の差などが大きいペアも見受けられ、難しい場合もあったため、バディを組むのは子ども一人ひとりの泳力も考慮した方が良いかと思われる。回っ

たコースについては、当日の潮の関係で浅瀬になってしまったせいでもあるが、ちょっと範囲が狭すぎたのではと思う。もう少し沖側を泳いだら、海水の透明度も増しただろうし、魚ももっとたくさん見られたかもしれない。(子どもに「先生、水が濁っていて魚が全然見えないよ。」と言われてしまった。) また、初日にハンドシグナルの重要性を感じさせることがあったので、時間に余裕があれば、子どもたちと一緒にハンドシグナルの確認を試みたかった。ハンドシグナルがちゃんとしていれば、子どもたちをもっと安心させることができたであろう。〇〇さんのように常にハキハキと言葉を発し、子どもたちをリードしていく方法はとても頼もしく感じるので見習おうと思う。

●感想●

今回の2泊3日のウォーターパトロール実習において、渡嘉敷島の美しい自然の中でさまざまなものを得た。水辺活動における楽しさの中、自然や人との関わりを学び、命の大切さを実感することで一段とたくましく成長できたことだろう。水辺でのライフスキルセービングや救命スキル、リスクマネジメントなど、今後生きていくうえで役立つ分野を学べたということに感謝したい。実践をすることで、知識だけでは何の役にも立たず、技術と行動力がついてはじめてリスクを削減できるということが分かった。

この実習を通して、みんなで協力して目的を達成することの素晴らしさや仲間がいることのありがたさを強く感じた。安全は1人では作ることはできない。安全を作るためには仲間が必要であり、その仲間とのチームワークも大切だ。普段から家族のように付き合ってきた生涯健康と体育科というチームだからこそお互いを信頼し合うことがで

き、コミュニケーションがとれて、向上し合えたと思う。渡嘉敷島の海は美しかった！魚がいっぱいいた！海ガメにも会えた！子どもたちともふれ合えた！みんなで食べたご飯は格別美味かった！私は、こんな短い期間でたくさんの感動を見つけた。いつまでもこの感動を忘れずに、日々頑張りたい。

研修生 HT レポート

★課題1★ ウォーターパトロール活動についてのまとめ

1日目

1,パトロール中、特に何に気を使いましたか？

実施に入る前に、第1に子供の呼吸を確保することと言われたので、パトロール中はシュノーケルのホースがちゃんと海面に出ているかを随時確認していました。また、浮いているだけの子供は疲れて休んでいるだけなのかどうかなど、子供の様子にも気を配るようにし、特に泳げない子供には常に注意を払うようにしました。

2,怖さを感じた瞬間はありましたか？それはどんな時ですか？

泳ぎながらずっと咳をしている女の子がいて、レスキューチューブを差し出してつかまらせ、少し休んで落ち着いたと思ったらすぐに1人で泳ぎだしたと思ったらまた咳をして苦しそうにするので、水を飲んで溺れそうになったらとドキドキしました。

3,良かったと思える点、反省しなければならない点は？

4人編成のチームパトロールで、みんなで声を掛け合いながら児童の泳ぎをうまく調整できたのが



ミーティングの様子



渡嘉敷島

よかったと思っています。

反省点としては、児童が水面下のサンゴなどを見すぎて、前の子にぶつかったり、列からはぐれたりするので、そこらへんのまとめ方をうまくやりたいと思いました。

●明日のパトロール活動へ向けての課題

今日の反省を活かして、児童の配列をうまく工夫していきたいです。泳げる子はどんどん先に行って列に間をあけてしまうし、苦手な子は遅れてしまうのでうまく調整していきたいです。

また、入水前に子供たちの体調のチェックや、何かあった時にパトロールを呼ぶよう声かけをしたり、自分達が隊列をつくってから入水するよう心がけていきたいと思います。

●その他、感じたこと、気付いたこと等

海はプールと違って波も深さも広さもあるので、プールの時のパトロール以上に子供たちの様子をしっかりと把握する必要があるなど感じました。

2日目

1、パトロール中、特に何に気を使いましたか？

2日目ということもあって、1日目の興奮等で寝れなかったり、疲れが取れていない児童がいると思い、必ず体調不良の確認をとってから入水するようにしていました。

また、昨日と同じように呼吸の確保がしっかりできているかの確認や、人数確認などは常時行い、ペース配分やバディとの連携をしっかりとするよう心がけました。

2、怖さを感じた瞬間はありましたか？それはどんな時ですか？

潮が引いて浅くなっていたので、児童がサンゴにぶつかりそうになった時にはひやっとしました。

また、体調不良の子が咳をして水を飲んでしまった時もあり、子供の様子を十分に見ていて良かったと感じました。

3、良かったと思える点、反省しなければならない点は？

昨日の課題となっていた、入水時の隊列や児童への声かけなどがしっかりと出来ていたことと、昨日とコースが変わったので、その時に児童がサンゴに接触しないように臨機応変に対応できてい

たことです。

自分自身の反省としては、途中でフィンが取れてしまい隊列を乱してしまったので、明日は気をつけたいと思います。

●明日のパトロール活動へ向けての課題

最終日なので、最後まで気を抜かずにしっかりと児童の観察をし、気を配ることを意識したいです。パトロール員の中にサンゴに接触してけがをってしまった人もいたので、児童がそうならないように注意を払いたいと思います。

そして最終日だからこそ、児童と積極的にコミュニケーションをとり、渡嘉敷の海を満喫させたいと思っています。

●その他、感じたこと、気付いたこと等

マスクに水が入ってからか、頻繁に外そうとする児童がいるらしいので、そこにも注意を払いたいと思います。

●前日の課題は達成できましたか？

達成できました！！

3日間のウォーターパトロール実習を終えて

●自信となった点は？

・周囲の状況を把握し、それに応じて対応することが出来た。

・パトロールチームとのコミュニケーションを積極的に図ることで、児童の安全により注意を払っていた。

・児童とのコミュニケーションもとることが出来た。

●自分に不足していると感じた点は？

児童を叱ること、ほめることの技術がまだまだだなと感じました。海はいま間違えると命に関わるので、危ないと感じたら厳しく注意をする必要があると思いました。

●その他、感想

子供たちの安全を確保するよう心がけながらも、自分自身も渡嘉敷の海を満喫することが出来てすごく充実した3日間になりました。また、海での救助法についても新しいことを学ばせてもらえて勉強になることが多かったです。

今回の実習で、学科のメンバーだけでなく、体育科やその院生、教員の方々とも交流を深めることができたので今後の活動でも一致団結して取り組

むことが出来るようになったんじゃないかなと感じています。とてもいい実習なので、来年もぜひ行ってほしいです。

★課題2★ 今回のような教育実践で、自分だったらどうやって指導するか？

私がもしそのような立場になった時には、途中からサングや魚に見慣れて飽きてしまっている児童が多かったので、毎日コースを変えて児童を楽しませてあげたいです。自分自身が沖のほうへ出て泳いだときはすごく楽しかったので、児童にもあのような感動を味あわせてあげるために、少しでも沖のほうにも連れて行ってあげたいと思います。

その際には、バディ1組に対し1つのレスキューチューブを配布したり、泳ぎに自信のない子にはレスキューチューブを浮き輪状にして持たせるなどして、今回以上に安全に気を配りたいです。そして、あまり長い距離を泳ぐのは難しいので、今回のように何周か回るのはなく、1往復のみで行いたいと思います。また、パトロール1チームに対して1つはボードを使ったり、ロープの位置を工夫したりするなど周囲の環境にも手を加えたら実現可能なのではないかと考えています

4 おわりに

大学教育の中でライフセービング教育が熱望され、事故防止、生命尊厳を普及していく社会貢献活動が大いに期待されている。本プロジェクトは、「海を活かした教育」を推進するうえで必要となる人材を育成するため、海の知識、海辺での救助技術、救命技術、ライフセービングスキルなどの知識と実践力を高めてきた。参加した学生らの振り返りから、「児童の命を預かる責任の重さ」、「児童の思わぬ行動や個への配慮」、「児童との関係の深まり」、「ライフセービングの専門的知識の大切さ」等々の気づきが述べられている。さらに、今回の実践を踏まえた形で、自分が海での教育実践を行う場合はどうするのかということに対して一歩進んだ洞察力と企画力を提示する力が養われている。よりよい実践は、専門的知識に裏付けられた省察的実践

により指導者としての資質が向上すると考えられ今回のプロジェクトの課題は達成されたと考える。また、学生らはライフセーバーとしての効力感が高まると同時に自分の泳力や体力のなさなど自分の弱点に向き合うことも体験している。自己の欠点や弱点を知ることは、児童生徒の生命を預かる体育教師、スポーツ指導者をめざす際の出発点としても貴重な実践の機会を与えられたといえよう。ライフセービングプログラムの開発と実践を行って多くの成果を得たが、次年度への課題として以下の2点が判明した。

①実践トレーニングプログラムの再検討が必要である。

②身体能力項目を含む評定基準を設け認定証を授与する。

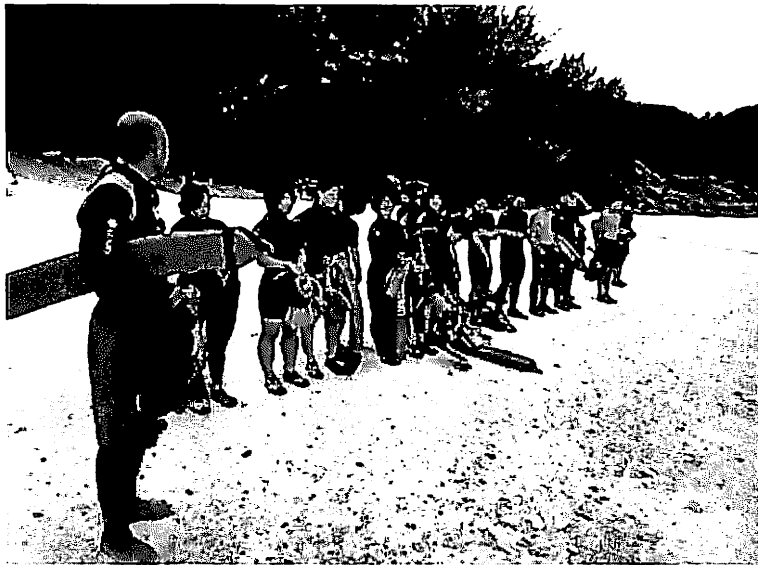
①については、「息止め」、「泳ぐ」をはじめ泳力強化を図りながらライフセーバーとしての身体能力(力、スピード、敏捷性、柔軟性、持久性)を高めるプログラムを検討したい。

②については、①の客観的指標を得ると共にモチベーションを高めると同時に自効力感を与えるために必要だと考える。

最後に、今年度日本財団の助成を得て海洋教育人材育成のためのプロジェクトを執行した。何もかもが初めてであり、試行錯誤が多かったが幸い附属小学校教職員との連携もスムーズに行われ、学校行事「かかやけ！自然体験学習」のシュノーケリングプログラムを安全に実施できたことに感謝したい。海洋国家である日本、島嶼環境の沖縄県において海の危険を十分理解しつつマリンスポーツを楽しめる人材を育成する指導者養成を大学教育で行うことは時代的要請でもある。今回の成果と課題を踏まえて次年度に生かしていきたい。

参考文献

小峯 力、小粥 智浩、稲垣 裕美：「体育・スポーツ系大学における Lifesaving 教育の体系化：救命・トレーナーの視点から BLS への試み」 流通経済大学スポーツ健康科学部紀要 1 (1) , 45-53, 2008-03



2010年7月 ウォーターパトロール体験